

中学校における漢詩の実践報告

主体的に学ぶ生徒を育む漢詩授業の在り方

岩手大学教育学部附属中学校 教諭 鈴木 駿

1 はじめに

近年、日本人の言語力の低下が至る所で危惧されている。パソコンやスマートフォンなどの電子機器を使うことで、漢字を読むことはできても書けない人、文章をいざ書くころと思ってもうまく書くことができない人が多くなってきている。まして中学生は、主なコミュニケーションツールといえばSNSである。短いテキストメッセージでのやり取りが横行しており、言語力の低下、その自覚を持つことすらままならないのではないかと国語科教員としては悲観している毎日である。『AIに負けない』¹⁾といえ、今や「Society 5.0」の時代を迎え、教育現場においてもICTの重要性が説かれる時代である。大切なのは、そのような時代の流れにあって、どのような言語力を生徒に獲得させていくか、なのではないだろうか。豊富な語彙や磨かれた表現力は生徒のこれからの社会を生き抜く上での大切な素養となる。授業のあらゆる場面で自らの言語力を客観的に評価することが重要である。そこで、様々な制限の中で考え抜かれた美しい表現、リズム感に溢れる漢詩に触れることは、生徒に言葉の持つ力を実感させる教材になりうるかと考える。漢詩が今もなお教科書に掲載されている価値は、そこにあるのではないだろうか。

その一方で、漢詩についての学習者のイメージのアンケート調査を行ってみると、半数近くの学習者が「内容が難しそうだ」と答えている。漢字のみの文章のため、なかなか親しみを持たず読むことができないということだそう。これまでも古典の学習では、枕草子や徒然草、平家物語に取り組んだが、内容的な興味関心が深い一方で、その読みづらさには抵抗を感じている学習者も多かったように感じている。作者の表現の工夫や思いに寄り添わせつつ、漢詩に興味を持たせたい。また、韻文の学習経験から、表現技法があるのではないかと、独特のリズム感や、詩の形式があるのではないかとといった回答も見られた。既習の学習内容にも触れながら、漢詩特有の表現の工夫に気付かせていく。さらに、中国文化と日本文化のつながりに言及している学習者も多い。漢詩の理解には、その当時の中国文化を知ることでもある。様々な情報を学習者に提示しながら、より深い漢詩の理解につなげ、漢詩に親しむ態度の育成も図ろうとするのが、本実践の目的である。

内容が難しそうだ	42%
内容が面白そうだ	3%
漢文独特の表現がありそうだ	32%
中国文化とのつながり	23%

【表1】 学習前の漢文に対するイメージ

2 漢詩のもつ教材性

古典作品において、日本と中国の間は深く、古来より中国から入ってきた言語文化は日本文化を語る上で欠かせないものとなっている。それは、漢字をもとにして万葉仮名や平仮名、片仮名などが生まれてきたことが大きく関わってくる。また、漢文は鎌倉時代から明治時代までは公文書として扱われることもあった。そのため、漢文を学習することは、中国の文学とその歴史を学習することになると同時に日本の文化を学ぶことにもなると考えてもよいだろう。また、漢詩は中国の古典作品であるが、訓読法により、日本の文学に深く溶け込んでおり、日本の古典として考えることもできる。訓読法は、漢字文化を共有する日本・中国の特殊な環境下で生まれた。漢文訓読文は日本文化人の基礎的教養として重要視され、我が国の伝統や文化に大きな影響を与えている。日本では、唐の時代の詩が高く評価されている。漢詩は比較的自由にうたわれ、韻律も定まっていなかった。詩と韻律が一定の形式に定められた近体詩に分類されている。今回の単元では近体詩を扱っていく。字数の少ない詩のほうが親しみやすいと考えられがちだが、詩の読解はたやすいものではない。凝縮された詩情は、散文のように説明的でなく、難解である。しかし、説明的でないがゆえに自由で、発展的な読解が可能な漢詩を、中学生のみずみずしい感性で味わわせたい。

3 指導の構想

漢詩の学習は往々にして学習者に学習の必要性や楽しさを感じさせることが難しく、筆者自身は学習者に学習の意欲付けを行う必要性は感じながらもなかなかその実際は訓読の方法や漢詩の形式、押韻や対句などといった学習事項を押さえるのみといった授業になりがちであった。今回は漢詩を学ぶ意義に気付かせつつも、学習者自らの言語生活を振り返り、今後の言語表現に生かしていく態度を養う時間とした。

漢詩は限られた字数の中で情景や作者自身の心情などを表現することが求められるものであり、作者はその制

限の中で実に多くの工夫を交えながら豊かに詠い上げている。今回の単元では、鑑賞文を書く活動を通してそうした作者の工夫に気付くことができるようになることはもちろんのこと、漢詩が描く情景を具体的に想像する力を養っていきたい。私たち日本人は漢文や漢詩を日常の言語生活の文脈におくことが難しい。しかし、漢文は今日の日本の言語文化を語る上で欠かせない存在であることは先に述べたとおりである。漢文や漢詩を学ぶことは我々日本人の言語文化の一端を知ることにもつながるとともに、国語の本質にも迫る大切な学習の一つである。今回は単元の中で中国文化と日本文化の関りについても触れ、学習者に漢文を学ぶことの意義についても考えさせたいと考えた。また、今回は漢文の中でも韻文である漢詩の学習である。これは日本語における韻文にも共通して言えることだが、韻文を学ぶことは少ない文字数の中で効果的に読者に自分自身の思いを伝える力を養うことにつながる。さらに漢詩については起承転結を意識した構成であったり、押韻であったりと、より洗練された言語表現が一つの作品にふんだんに盛り込まれている。そういった筆者の工夫に気付かせる手立てを授業の中で講じながら、学習者を深い学びに誘いたいと考えた。

また、これまでの1単位時間の振り返りは、授業の終末に行うことが多かった。しかし、自分の考えの変容についてうまくまとめることができないなどの課題が見られた。そこで、授業の終末に振り返りを行うことにこだわらず、学習内容や指導目標に照らし合わせながら、適切な機会を設けて振り返りを行った。今回の単元でははじめの問いから自然発生的に生まれる新たな問いを設けることを意識して1単位時間当たりの授業づくりを行っている。その思考の過程における学習者の学びの変容や深まりがみられるように、言葉による見方や考え方をどう働かせたのかを振り返らせた。その際、誰のどんな発言によつて自分の考えを構築したのかについて気付かせた。そして、終末では指導者が提示した新たな視点や手立てによつて変容した自分の考えを書かせることを心掛けた。

4 単元計画

(1) 育成を目指す資質・能力

【知識及び技能】

- ・ 多義的な意味を表す語句の意味について理解し、語感を磨き、語彙を豊かにすることができる。
- ・ 漢詩を読むことを通して、漢詩に表れたものの見方や考え方をとらえることができる。

【思考力・判断力・表現力等】

- ・ 漢詩を読み、漢詩の構成や表現の効果について考え、自分の考えをもつことができる。

【学びに向かう力、人間性等】

- ・ 漢詩に表れているものの見方や考え方、表現の工夫を考えることで、自らの語感を磨き、表現に生かそうとする。

(2) 指導目標

漢詩を読み、作者の洗練された表現に触れさせ、その心情や描かれた情景を捉えさせる。

(3) 評価規準

【知識・理解】

- ① 多義的な意味を表す語句の意味について理解し、語感を磨き、語彙を豊かにしている。(1)―イ)
- ② 漢詩を読むことを通して、漢詩に表れたものの見方や考え方をとらえている。(3)―イ)

【思考・判断・表現】

- ① 読むことにおいて、漢詩の構成や表現の効果について考え、自分の考えをもっている。(C―エ)

【主体的に学習に取り組む態度】

- ① 漢詩に表れているものの見方や考え方、表現の工夫を考えることで、自らの語感を磨き、表現に生かそうとしている。
- ② 粘り強く漢詩に表れているものの見方や考え方、表現の工夫を考え、鑑賞文を書くようとしている。

次時	学習活動	見取りの観点
1	(1) 単元の見通しをもつ。 (2) 漢詩の空欄にはどんな漢字がふさわしいか考える。 (3) なぜ「燃」という漢字を作者が用いたのか考える。	思① 筆者の用いた漢字の効果について叙述を根拠に記述しているか。(OPPシート) 態① 漢詩に表れているものの見方や考え方、表現の工夫を考えることで、自らの語感を磨き、表現に生かそうとしている。(OPPシート)
2	(1) 押韻にはどんな効果があるのか考えさせる 押韻は漢詩独特の表現ではなく、日本語や英語においても使われている技法であることに気付かせる。 (2) 漢文が日本の社会や言語文化に与えた影響について考えさせる。	知① 押韻のもつ効果について理解している。(OPPシート)
3	(1) 漢文が日本の社会や言語文化に与えた影響について考えさせる。 (2) 複数の漢文を読み、自分が鑑賞文を書きたいと思う作品を選ばせる。	知② 漢詩に表れたものの見方や考え方をとらえている。(OPPシート) 態① 筆者の物の見方や考え方を理解しようとしている。(観察)
4	(1) 自分が選んだ漢詩の鑑賞を行う。 形式、押韻は何だろう。 起承転結はどうなっているのだろうか。 どのような情景、心情が描かれているだろうか。 その中で、自然を表す表現がそれぞれどのような効果をあげているだろうか。	知① 筆者の用いた漢字の効果について理解している。(学習シート) 思① 漢詩の構成や表現の効果について考え、理解している。(学習シート)
5	(1) 鑑賞文を書かせる。 筆者の表現の工夫、構成、描かれている情景と心情について触れながら書かせる。	思① 漢詩の構成や表現の効果について考え、理解している。(作品) 態② 漢詩に表れているものの見方や考え方、表現の工夫を考え、鑑賞文を書こうとしている。(作品)
6	(1) 互いに作品を読み合う。 (2) 単元の振り返りを行う。	態① 他者の鑑賞文から表現の工夫を読み取ろうとする。(OPPシート)

(4) 指導計画及び評価計画

5 単位時間当たりの授業の展開について

【1時間目】

導入では、はじめに学習者からあらかじめ取ったアンケートの結果を共有する。漢文や漢詩が学習者にとって身近なものとして感じる事ができていないことを共有し、それでも今なお読み継がれている漢文や漢詩には必ず読む意義があるはずだという意識を共有したい。また、学習者にも身近に感じさせるために解釈が容易で内容的にも想像しやすい作品を提示することで、漢文に対して身構えずに取り組む姿勢を作りたい。今回用いる作品は杜甫『絶句』である。展開の前半では、漢詩の一部分が空欄になったものを学習者に提示し、空欄にふさわしい漢字は何かを考えさせる。その際、描かれている情景を想像させたり、他の言葉に着目させたり、他の行と比較させながら、これまでに学んできた言葉による見方や考え方を働かせながら迫らせたい。考えを形成していく中で対比や詩の構成を意識しながら読む姿勢を養うとともに、どんな情景が描かれているのかを考えさせる。学級での共有を図った後に、他者との交流の中で気づいた新たな見方や考え方の違いに気付かせたい。展開の後半では、空欄になっっている漢字は直接的に色を表現している漢字ではなく、「燃」という漢字であるということを確認する。これは、単なる赤色とは異なり、燃えるように鮮やかな赤色を表現するため、さらには後半の作者自身の虚しさとの対比をより鮮明に描くために作者が選んだ言葉である。なぜ「燃」という漢字を作者が使ったのか、その真意を考えさせることで筆者の表現の工夫に迫りたい。最終では、作者の言葉による見方や考え方を踏まえつつ、自分の考えとの比較をさせるとともに、今後どのように学習を進めていきたいかを書かせたい。

【2時間目】

1時間目で考えた「燃」という漢字が使われた意図が、漢字の本来持っている意味の他に、押韻のルールに基づいていることを学んでいく。押韻という言葉は日頃馴染みのない言葉ではあるが、実は押韻は日常の生活においてもよく使われている表現技法であることを学習者に投げかけ、どのような場面で押韻が生かされているか考えさせ

る。ここで上がってくるのは「ラップ」や「J-POP」など、学習者が普段親しんでいるものが挙げられる。どのように押韻が使われているのか、実際に聞いてみることで実感を与えたい。加えて押韻がもたらすものは何かを考え、リズムを生み出したり、主題に迫る語句の強調の効果などを押さえさせる。また、押韻が日本だけでなく、中国語や英語においても使われていることを「世界に一つだけの花」を中国語、英語の歌詞をつけて聞かせる。

【3時間目】

杜甫がなぜ故郷に帰ることができなかったのかを考える時間である。あえて学習者には何の情報も与えず、あくまでも自分の予想として考えさせたい。そうすることでその答えにたどり着くためには中国の歴史的背景を押さえる必要性に気付かせたところで、学習者に当時の歴史的背景や杜甫の人生についての情報を提示する。

授業の終末では、教師が選んだ九つの漢詩の中から鑑賞文を書くために一つ選ばせる。提示した漢詩は以下の通りである。

- ①涼州詞 王翰 ②送元二使安西 王維 ③黄鶴楼送孟浩然之広陵 李白 ④江雪 柳宗元 ⑤静夜思 李白
⑥香炉峰下新卜山居草堂初成偶題東壁 白居易 ⑦春望 杜甫 ⑧七步詩 曹植 ⑨哭晁卿衡 李白

【4時間目】

個人での鑑賞の時間である。はじめに漢詩を鑑賞する視点について考えさせた。これまでに学習者は短歌の鑑賞も行っており、3時間目までに学習した内容と合わせて振り返った。①情景②作者の心情③押韻④対句などの表現技法⑤構成⑥漢字の意味などを吟味することを確認した。

【5時間目】

鑑賞文を書く時間である。それぞれの学習者が前時に鑑賞した内容をもとに、鑑賞文を書かせた。

【6時間目】

それぞれが書いた鑑賞文をグループで読み合い、交流を行った。学習者はおたがいの鑑賞文を①情景が浮かぶ作品か②作者の心情が伝わってくる作品か③作者の表現の工夫がわかる作品か④読んで納得できる作品か⑤その漢詩の魅力が伝わってくるか、といった視点で評価をした。その後、漢詩の魅力とは何かを考え、学級で交流し、最後に単元のまとめを行った。

6 おわりに

今回の実践を行った後のアンケートでは、大半の生徒が漢詩に対して肯定的に捉えるように変化していた。漢詩のもつ面白さや価値に気付き、主体的に鑑賞を行おうと学習に取り組む生徒が多く見られ、概ね単元のねらいに迫ることはできたと感じている。

その一方で課題となったのは、「我が国の言語文化」を次世代にどう継承していくのかといった視点を学習者に持たせる指導のあり方である。学習指導要領では、我が国の言語文化に関して、以下のよう

に記述されている。
我が国の言語文化に関わるとは、我が国の歴史の中で創造され、継承されてきた文化的に高い価値をもつ言語そのもの、つまり、文化としての言語、また、それらを実際の生活で使用することによって形成されてきた文化的な言語生活、さらには、古代から現代までの各時代にわたって、表現し、受容されてきた多様な言語芸術や芸能などに関わることである。

国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養うことを求めているのは、我が国の歴史の中で育まれてきた国語が、人間としての知的な活動や文化的な活動の中枢をなし、一人一人の自己形成、社会生活の向上、文化の創造と継承などに欠かせないからである。国語に対する自覚や関心を高め、話したり聞いたり書いたり読んだりすることが、生徒一人一人の言語能力を更に向上させていく。その中で、国語を愛護し、国語を尊重して、国語そのものを一層優れたものに向上させていこうとする意識や態度も育っていくのである。

漢文が我が国の言語文化や日常に大きな影響を及ぼしていることを踏まえ、日常の文脈に漢文を位置づけた単元の在り方を今後探っていく必要がある。

7 参考文献

- ・ 松浦友久 (1987) 『校注 唐詩解釈辞典』大修館書店
- ・ 石川忠久・前野直彬 (1979) 『漢詩の解釈と鑑賞辞典』旺文社
- ・ 前野直彬 (1970) 『唐詩鑑賞辞典』東京堂出版
- ・ 田近洵一／井上尚美 (2013) 『国語教育指導用語辞典』第4版 教育出版

漢詩に否定的な感想	3%
肯定的な回答	97%

【表2】 学習前の漢文に対するイメージ

- ・ 細川太輔 (2020) 『教育科学 国語教育』 1月号 明治図書 p.76
- ・ 莊魯迅作 (2013) 『声に出してよむ漢詩の名作 50: 中国語と日本語で愉しむ』 平凡社新書